

ふれあい曾山医院

志筑1391-9
Tel:62-5566

2013年5月号
(第84号)

発行人
曾山 信彦



編集委員会



敦子 成氏 陽子 巳子
藤島 棟近 西岡 赤福 井岡 谷岡

熱傷(火傷)の治療について

火傷(やけど)やケガは、不意に起こります。こういった外傷を負った時、慌てずに手当てするにはある程度の知識と経験が必要です。今回は火傷の応急処置法と新しい創傷治療の方法について書かせていただきます。

まずは火傷(やけど)の応急処置です。ご存知の通り一番大切なことは患部を冷やす事です。冷やすにも色々な方法がありますが、清潔な流水(水道水でOKです)にさらすのがオススメです。患部を冷



やす目的と、患部の表面についての雑菌を洗い流して感染を防ぐためです。冷やす時間は様々な説がありますが、三〜五分程度で良いようです。熱によって皮膚の損傷が深くなるのを防ぎます。冷やす事で痛みが和らぎますがこれは神経を麻痺させている為なので長時間の冷却は不要です。また氷やアイスノンを直接長時間あてると皮膚を冷やしすぎて凍傷の原因になるので

注意して下さい。火傷の範囲が十円玉より小さくて赤くなりヒリヒリ痛む程度なら病院に行く必要はありません。一週間程度で良くなります。衣服の上から熱湯がかかる等して火傷した場合、水疱が破れて皮膚がむけてしまう危険があるので衣服の上から流水で冷やします。お風呂場に行ってもシャワーをかけるのが簡単です。衣服は無理に脱がず水疱は破らな

いように注意して下さい。水疱が出来ている場合や皮膚がズルむけている時は早く医療機関を受診しましょう。火傷の深さと面積や場所によって重症度が分類されます。重症な場合はショックを起こす危険があるので救急車での搬送が必要になります。



次に火傷の治療について。水疱は基本的には破りません。水疱の中には傷の治癒を促進させるために分泌された液体で満たされています。破って絞りだすのは勿体ないですね。傷口から細菌が入り込んで感染を起こしても厄介です。しかし大きな水疱で破れる可能性の高いものは事前に切り除きます。これは医療機関で安全に行うのでお家では破らないで下さい。患部はドレッシング材と呼ばれる創被覆材で覆い潤った状態に保ち皮膚の再生を促します。

当院では患部の状態に合わせて数日ごとに通院して頂き、患部の洗浄とドレッシング材の交換を行って治療しています。お気付きの方もおられるかと思いますが、基本的に消毒は必要ありません。最近の創傷治療において、消毒薬は細菌に対して殺菌効果があると同時に人の細胞にも影響を与え皮膚の再生を遅らせる。またガゼを貼って患部を乾燥させるのも好ましくないとという考え方が広まってきています。これが湿潤療法(ラップ療法や閉鎖療法とも呼ばれます)です。怪我をしたら「病院に行つて消毒してもらつておいで」と言われ、赤チンをつけて育った世代には多少の抵抗がありますが、自然治癒力を味方につけた治療法です。

(看護師 遠松 美智子)

